HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世界屈指のパウダースノーによるスポーツツーリズム ： 北海道ニセコ地域の事例紹介と鉄道による新たな観光への期待
Author(s)	遠藤, 正
Citation	CATS 叢書, 11, 157-161
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66690
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_22.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

世界屈指のパウダースノーによるスポーツツーリズム

北海道ニセコ地域の事例紹介と鉄道による新たな観光への期待

遠藤 正
北海道大学観光学高等研究センター 客員准教授

1. はじめに

2003 年の観光立国宣言，2006 年の観光立国推進基本法の成立を契機に，我が国では観光が国家的な成長産業として大きく注目されるようになった。その後，2008 年には観光庁が設置され，観光立国を推進する体制も本格化した。観光庁では，様々な施策を打ち出し観光を推進しており，一例として 2011 年には，スポーツツーリズム推進基本方針を定め，スポーツを基軸とした観光が，全国でより一層推進する機運が高まったのである。それではスポーツツーリズムがこれから取り組む全く新しい分野の観光なのだろうか。答えは否である。その先行事例として，スキーによるスポーツツーリズム，特に北海道ニセコ地域のスキーの変遷を紹介する。

さて，今から数十年前となるが，我が国では 1980 年から 1990 年前半にかけ全国的なスキーブームが到来した。日本全国にはスキー場や宿泊施設など数多くのスキー観光を楽しむための施設が整備され，年末年始を中心に多くのスキー観光客がゲレンデに集ったのである。リフト乗車待ちの長蛇の列，毎年のように発表されるスキー用品のニューモデル，スキー場を舞台とした映画，スキーのテレビ番組など，今となっては想像し難いが，スキーは国民的なスポーツの一つとなった。しかし，こうしたスキービジネスの好調も長期的には続かず，バブル経済の崩壊と共に，スキー人気が下降し，スキー人口も一気に減少したのである。人々のスキー離れが生じると，スキー場をはじめとするスキー関連産業は一気に厳しい経営状況に陥り，冬季のスポーツツーリズムの代表格であったスキーによるツーリズムは一気に縮小傾向となったのである。さらに，少子高齢化や余暇の過ごし方の変化など，社会的な変化も加わり，その後のスキー人口はなかなか当時のようには戻らず，今なお全国各地で厳しい状況が続いている。このように停滞した状況を打破しようと全国のスキー関係者は，スキー人口の増加に向け，若者を惹きつけるための企画，新たなスキーレッスンのプログラムの開発，特典付のリフト券の販売など様々な取組みを行っているが，こうした取組みが定着し，成果が発揮されるには，もう少し時間を要するだろう。また，我が国は既に人口減少段階に入り始めていることから，こうした企画が功を奏したとしても，従来と同じようなレベルでスキー人口を回復することは容易ではない。

さて，全国各地のスキー場がバブル経済崩壊以降の集客に苦戦を強いられる中，2000 年代前半以降，国内のスキー業界関係者の取組みとは別の外発的な要因によって，新たなマ

ーケットが北海道ニセコ地域に形成されはじめた。既に報道等により広く知られるところとなった北海道ニセコ地域にスキーのために来訪する外国人スキー観光客である。中心となったのは主にオーストラリアからのスキー観光客である。毎冬パウダースノーと呼ばれる良質な粉雪を求めて，ニセコ地域に大挙としてオーストラリア人が訪れる姿は，今や北海道ニセコ地域における毎冬恒例の光景である。

スポーツツーリズムを推進する観光庁が打ち出した目指すべき姿として「より豊かなニッポン観光の創造」という事を同庁ではうたっている。スポーツを通じて新しい旅行の魅力を創り出し，我が国の多種多様な地域観光資源を顕在化させ，訪日旅行・国内観光の活性化を図ろうとするものである。外国人スキー観光客が今やリピーターとなりニセコ地域に何度も来訪する現象は，スポーツツーリズムの先行事例としてヒントとなる点が多いのではないだろうか。

2. スノーリゾートとしてのニセコ地域の発展

北海道におけるスキーの始まりは，今から 1 世紀以上前の 1912 年にさかのぼる。すでに本州でスキー指導の実績のあるオーストリアのレルヒ中佐が旭川に赴任し，北海道でもスキー指導と普及がはじまった。レルヒ氏は，同年倶知安町にも訪れ，ニセコ地域でもスキー普及の活動を行なった。こうしたことが一つの契機となり，冬のスポーツとしてスキーがニセコ地域をはじめ，北海道全体に広がっていったのである。その後，スキーは広く楽しまれる大衆的なスポーツとなるのだが，その要因の一つがリフトの整備であった。ニセコ地域には 1960 年代に長距離のリフト建設が始まり，スキー客の大量輸送が可能となったことで本格的なゲレンデスキーが幕開けを迎えた。また，初のリフト建設に加え，新たなスキー場の造成も行われ，多種多様なコースが楽しめる現在のニセコ地域のスキー場の基盤が整備されたのである。こうしたスキー場開発と並行してホテルや旅館といったスキー観光客を受け入れるための宿泊施設整備も順次進み，スキーによるスポーツツーリズムが成長していったのである。特に 1980 年から 1990 年代前半にかけては，日本全国に及んだ爆発的なスキーブームがニセコにも到来し，ニセコ地域には北海道のスキー観光客は勿論，道外からも多数のスキー観光客が来訪し，国内のスキー観光客はピークを迎えたのである。

しかし，先述のようにこうした盛況の時代は長続きせず，バブル経済の崩壊とともに，国内のスキー観光を取り巻く環境は一気に悪化したのである。全国的にスキー離れが起こり，スキー場にはかつてのようなスキー観光客による賑わいを見ることはほとんど無くなったのである。

3. 外国人スキー観光客による新たなマーケットの出現

国内のスキー事情が一気に悪化した 1990 年代後半以降，日本国内ではスキーを取り巻く状況はなかなか好転しなかった。ところが，2000 年前半に入ると，ニセコ地域には新たな

スキー観光の形態が出現することになる。良質なパウダースノーを求めるオートラリアからのスキー観光客の登場である。従来，オーストラリアのスキー観光客は，良質な雪を求め，アメリカ合衆国やカナダあるいはヨーロッパなど海外に渡っていた。しかし，2000 年前後に一部のオーストラリア人スキー観光客がニセコ地域を訪れ，その雪質の良さを体感すると，ニセコの注目度は一気に高まったのである。雪質の良さとは一体どのようなことか少し解説したい。筆者はスキー指導者でもあるが，スキーが上達してからの楽しみの一つとして新雪滑走がある。整備されたコースを滑る「ゲレンデスキー」も楽しいが，大自然の中で新雪を滑り，粉雪を巻き上げて非日常的な浮遊感覚を味わえる「バックカントリースキー」も全く異なった楽しみがある。そして，バックカントリースキーで重要になってくるのが，浮遊感を演出するための上質な粉雪である。ニセコ地域の雪質は世界各国のバックカントリーを滑った多くのスキーヤーが「世界屈指のパウダースノー」と高く評価する。ニセコ地域の最大の地域資源となっているのが，スキーヤーを魅了する，このパウダースノーなのである。さらに，海外からのスキー観光客からは，「母国からの移動距離が短い」，「温泉など異文化も体験できる」，「北海道産の食材による美味しい食事がある」など，雪質に加え，観光面でも高い評価を得ている。北海道や日本のスキー観光客にとっては，どちらかと言えば日頃当たり前であったニセコ地域の様々なことが，全く価値観の異なる外国人スキーヤーの視点で評価された。

4. 日本型のスキーツーリズムと欧米型のスキーツーリズム

ところで，こうしたニセコ地域の外国人スキー観光客が来訪する要因として雪質の良さだけが注目されがちだが，それだけで全てを説明することは難しい。筆者は，スキー指導に携わって 20 年以上になるが，1990 年代までの国内スキー人気の高まり，その後の衰退，ニセコ地域における新たな外国人スキー観光客の登場など，北海道やニセコ地域が直面してきた一連の出来事をスキー場で体験してきている。そうした経験も加えて，観光地としての現在のニセコ地域の魅力を少し解説したい。外国人スキー観光客にとってニセコ地域のスキーの魅力が増したもう一つの要因は，外国人が楽しめるスキーリゾートへとニセコ地域が変わったからである。それについて，「欧米型のスキーツーリズム」と「日本型のスキーツーリズム」という考え方に基づき説明したい。

通常ニセコ地域に滞在する外国人スキー観光客の多くは，家族や友人らと一緒にコンドミニアムと呼ばれる施設に 1 週間前後からそれ以上ニセコ地域に滞在し，スキーを楽しむ。これを「欧米型のスキーツーリズム」とする。一方，日本人の場合は，日帰り，あるいは 1 泊 2 日から 3 泊 4 日といった一週間に満たない短期型の滞在が多い。こうしたスキーの観光形態を「日本型のスキーツーリズム」とする。さて，こうした分類でスキー観光を考えた場合，2000 年頃までのニセコ地域は当然ながら「日本型のスキーツーリズム」を受け入れるための施設が中心であり，それらが整備されて来た。一方，2000 年の前半以降，ニ

セコの雪質の良さに気付いたオーストラリアに代表される外国人のスキーヤーや投資家は，既に経験している「欧米型のスキーツーリズム」をニセコ地域で実現するため，コンドミニアムに代表される施設整備に動き始めたと考えられる[1)]。スノーリゾートとしてのニセコ地域のポテンシャルに対し，一定の評価を与えた投資家や起業家が「欧米型のスキーツーリズム」実現への投資を行ったことが，現在のニセコ地域の活況に繋がった大きな要因の一つと言えよう。現地を訪れる外国人スキー観光客の中には，すでに他国でのスキーリゾートを経験している者も少なくなく，「日本型のスキーツーリズム」をターゲットにした従来の環境だけでは，こうした顧客を満足させることがなかなか難しかったのではないだろうか。

また，具体的な「欧米型のスキーツーリズム」のニーズは，現在あるコンドミニアムを詳細に観察することで浮かび上がってくる。従来の日本のホテルや旅館とは異なり，長期滞在を前提とした，キッチン，食器，冷蔵庫，洗濯機，インターネット環境などがコンドミニアムには整備されている。また，各部屋にベッドルームが備え付けられ，それぞれにシャワーやトイレなども設置され，プライバシーが保たれる構造となっている。国内スキーヤーを顧客のメインとしてきた「日本型のスキーツーリズム」ではこうしたニーズに十分に応えることができなかったのである。「欧米型のスキーツーリズム」と「日本型のスキーツーリズム」の違いはこうしたところにも顕著に現れているのである。勿論，古き良き日本の建物や文化といった，日本的な側面を重視する外国人スキー観光客も実際には存在することも忘れてはならないし，そのような路線を重視することも差別化の戦略としては重要である。肝心なことは，「欧米型」，「日本型」の優劣ではなく，どのようにスキーリゾートの特徴を打ち出し，顧客となるスキー観光客のニーズに応え，満足度を高めて行くか。これがツーリズムの本質的部分であろう。

5. これからのニセコ地域における観光創造と鉄道事業への期待

ニセコ地域における外国人宿泊延数は 2007 年には約 14 万 3 千人泊であったが，2015 年には 3 倍近い 39 万 1 千人泊と大きな伸びとなっている。一方，観光客を受け入れるための体制整備の一例として，ニセコ地域にある倶知安町では外国人の冬季の住民登録数は，2007 年末には 370 人程度であったが，2015 年には 1,000 名を越えた。急速に増加する外国人観光客の状況がこうした数字からもうかがえる。

さて，こうした現在のニセコ地域の状況は，我が国で過去に起きたバブル経済時のような現象とする見方も少なくない。しかし，一方では，こうした 2000 年代前半に始まった外国人スキー観光客の動きは，2008 年の世界同時不況時，2011 年の東日本大震災時など観光にとって厳しい場面に何度か直面し，一時的に海外からのスキーヤーも減少したものの，その都度回復基調に戻る強さも持ってきている。最近の倶知安町の統計によると，アジアからの観光客も急速に伸びてきており，オーストラリアが多くを占めていたスキー観光客

の客層に大きな変化が生じている。ニセコ地域の将来がどのようになるか，その予測は難しいが，多くの外国人スキーヤーが来訪しているこの時期にこそ，将来へ向けての様々な種蒔きや準備に期待したい。

さて，オーストラリア人のスキー観光客を主なターゲットにしたビジネスにより，2000年代のニセコ地域は全国のスキー場と比べても目覚ましい変化を遂げてきたことを説明したが，課題もそれなりに顕在化している。例えば，宿泊滞在型の観光は特に冬季に偏っており，企業の安定した経営や雇用の安定の面からも，将来的には通年での安定した観光が望まれることは言うまでもないだろう。そうした課題に対処するため，現在ニセコ地域では主に北海道外の顧客が夏季に長期滞在するロングステイ事業なども推進し，冬季にのみ利用されていた素晴らしい宿泊施設が夏季の長期滞在にも利用されてはじめている。夏季の利用者数は，過去と比べると増加した，冬季の利用状況と比較すると，これからに期待するところであろう。夏季におけるニセコ地域の観光資源は，冬季のパウダースノーほど世界に知られているとは言い難いが，コンドミニアムや施設のオーナーの中には，夏季にもニセコ地域を頻繁に来訪するものもおり，例えば湿度の低さなど外国人目線での夏季のニセコ地域の良さも発見されつつある。

さて，こうして通年観光が期待されるニセコ地域の観光に，2017 年新たな魅力が加わる予定である。JR 東日本が 2017 年より営業開始する「TRAIN SUITE 四季島」である。同社資料によると「まだ，知らないことがあった，という幸福」を実感していただく旅が，コンセプトの一つである。上野駅を出発し，豪華な寝台列車を活用した旅の提案である。斬新なデザインの車両による北海道への旅は，日本人，外国人を問わず，観光する者にとって新たな魅力となるであろう。この「四季島」による旅にはニセコ地域も含まれたものもあり，素晴らしい車両と上質なサービスに加え，大自然に囲まれたニセコの観光が満喫されるに違いない。そして，後年になるが，2030 年度末には札幌まで北海道新幹線が延伸される予定であり，倶知安町にニセコ地域の玄関口となる駅が開設予定である。現在，特に冬季の外国人スキー観光客の多くは空路で来道し，ニセコへ向かっている。2030 年度を境にこうした動きがどのようになるのか非常に興味深いところである。新幹線を利用して，本州も北海道のスキーも両方楽しめる，そのような鉄道を活用したスキーツーリズムに大いに期待するところである。

最後に，2030 年代のニセコ地域のパウダースノーや夏季の観光がどのように変化しているのか，将来を予測するのは難しい。しかし，四季島や北海道新幹線など，今までになかった魅力が加わったニセコ地域には，大きな可能性を感じずにはいられない。世界屈指のパウダースノーと共に，素晴らしいデスティネーションとしてこれからも輝き続けるよう，未来のニセコ地域の観光創造に大いに期待するところである。

注

1）コンドミニアムの開発で中心となる企業の設立も 2003 年である。